がん教育に必要な内容　　※ 外部講師を用いたがん教育ガイドライン（H28.4 文部科学省）による

児童生徒に対して指導する上では、発達段階を踏まえ、専門用語に偏らずに、誰でも分かりやすい言葉を用い、授業を実施する前に、学校の教員と指導上の留意点を確認した上で、例えば以下のような内容について指導することが考えられる。

ア　がんとは（がんの要因等）

がんとは、体の中で、異常細胞が際限なく増えてしまう病気である。異常細胞は、様々な要因に

より、通常の細胞が細胞分裂する際に発生したものであるため、加齢に伴いがんにかかる人が増え

る。また、数は少ないが子供がかかるがんもある。

がんになる危険性を増す要因としては、たばこ、細菌・ウイルス、過量な飲酒、偏った食事、運

動不足などの他、一部のまれなものではあるが、遺伝要因が関与するものもある。また、がんに

なる原因がわかっていないものもある。

イ　がんの種類とその経過

がんには胃がん、大腸がん、肺がん、乳がん、前立腺がんなど様々な種類があり、治りやすさも

種類によって異なる。また、がんによる症状や生活上の支障なども、がんの種類や状態により異な

っている。病気が進み、生命を維持する上で重要な臓器等への影響が大きくなると、今まで通りの

生活ができなくなったり、命を失ったりすることもある。

ウ　日本におけるがんの状況

がんは、日本人の死因の第１位で、現在(2014年)では、年間約37万人の国民が、がんを原因と

して亡くなっており、これは、亡くなる方の三人に一人に相当する。また、生涯のうちにがんにか

かる可能性は、二人に一人（男性の62％、女性の46％（2011年））とされているが、人口に占め

る高齢者の割合が増加してきていることもあり、年々増え続けている。がんの対策に当たって、す

べての病院でがんにかかった人のがんの情報を登録する「全国がん登録」を始め様々な取組が行わ

れている。

エ　がんの予防

がんにかかる危険性を減らすための工夫として、たばこを吸わない、他人のたばこの煙をできる

だけ避ける、バランスのとれた食事をする、適度な運動をする、定期的に健康診断を受けることな

どがある。

オ　がんの早期発見・がん検診

がんにり患した場合、全体で半数以上、早期がんに関しては9 割近くの方が治る。がんは症状が

出にくい病気なので、早期に発見するためには、症状がなくても、がん検診を定期的に受けること

が重要である。日本では、肺がん、胃がん、乳がん、子宮頸（けい）がん、大腸がんなどのがん検

診が行われている。

カ　がんの治療法

がん治療の三つの柱は手術治療、放射線治療、薬物治療（抗がん剤など）であり、がんの種類と

進行度に応じて、三つの治療法を単独や、組み合わせて行う標準治療が行われている。それらを医

師等と相談しながら主体的に選択することが重要となっている。

キ　がん治療における緩和ケア

がんになったことで起こりうる痛みや心のつらさなどの症状を和らげ、通常の生活ができるよう

にするための支援が緩和ケアである。治らない場合も心身の苦痛を取るための医療が行われる。緩

和ケアは、終末期だけでなく、がんと診断されたときから受けるものである。

ク　がん患者の「生活の質」

がんの治療の際に、単に病気を治すだけではなく、治療中・治療後の“生活の質”を大切にする考

え方が広まってきている。治療による影響について十分知った上で、がんになっても、その人らし

く、充実した生き方ができるよう、治療法を選択することが重要である。

ケ　がん患者への理解と共生

がん患者は増加しているが、生存率も高まり、治る人、社会に復帰する人、病気を抱えながらも

自分らしく生きる人が増えてきている。そのような人たちが、社会生活を行っていく中で、がん患

者への偏見をなくし、お互いに支え合い、共に暮らしていくことが大切である。